

## ハワイの野生動物の保護と アジアン・セトラコーニアリズム： ハンターによる「ローカルの種」の創出

加藤 恵理

### はじめに

アジア系アメリカ人であるブライアンは、幼少期から30年近くの地元のハワイでハンティングをしてきたが、2015年に初めてアクシスジカの剥製を作ったとして、次のように語った。

今まで一度も剥製なんて作った事はなかった〔…〕だけど、遠くない将来、ハワイで野生のシカが見られなくなる日がくるんじゃないかと思ったんだ。〔…〕作ったのはフルマウント（首から上ではなく全身の剥製）だよ。費用はかかったけど、ハワイの動物の姿をきちんと後世に伝えたいからね<sup>1</sup>。

ハワイでのフィールドワークの最中に筆者がインタビューした地元のハンターの多くが「ハワイの自然・動物は危機に瀕している」と発言し、土地の自然に対する思いを語った。地元のハンターは「ハワイの森にいて然るべき動物」のイメージを共有しており、彼/彼女らにとってアクシスジカがハワイにいることは自然なことである。しかし、アクシスジカが消えつつある原因は、この種がハワイの在来種に対する害であるとして、州政府や自然保護団体によって積極的な駆除が行われてきたためだ<sup>2</sup>。ブライアンの発言は「自然」を決めるのは誰か、「自然」

- 
- 1 筆者のフィールドノート、Brian Yamashiro, August 15, 2015. インタビュー対象者の名前は、本名のエスニック背景を反映させた仮名である。
  - 2 B. G. Kubota, "Axis deer on Hawaii island pose problem for state," *Honolulu Star-Advertiser*, May 28, 2011. Accessed August 12, 2017. <https://www.staradvertiser.com/2011/05/28/hawaii-news/axis-deer-on-hawaii-islandpose-problem-for-state/>. アクシスジカはインド原産で、1867年に日本から寄贈された種であるとされる。

は誰のためのものか、という環境史における重要なテーマに繋がっている<sup>3</sup>。本稿では、地元のハンターに焦点を当てて、ハワイにおいてどのような自然像が「自然」であるとされ、誰の自然像がハワイの環境を形成してきたのかを、アジアン・セトラー・コロニアリズムの概念を用いて考察する。

アジアン・セトラー・コロニアリズムとは、セトラー・コロニアリズムを土台とする概念だ。セトラー・コロニアリズムは、コロニアリズムを過去の事象とせず、植民地主義に基づく暴力が構造として社会で持続し続けることを捉えたもので、2000年代から学界で注目されてきた概念である<sup>4</sup>。セトラー・コロニアリズムにおいて、セトラーは先住民から奪った土地に定住し、後に人口的多数派となる。セトラーは、植民地の政治や法律、経済の中核に入り込み、先住民を排除し続ける社会構造を維持する。アメリカ合衆国（以下、アメリカ）は、セトラーが定住した典型的なセトラー・ソサエティとされる。アメリカ以外のセトラー・ソサエティとして代表的な地域には、中南米諸国、オーストラリア、南アフリカ、イスラエルなどがあり、これらの社会におけるセトラーは多くの場合、白人が想定されてきた。しかしハワイの場合は、人口的多数派であるアジア系住民が、植民地化において白人の共犯者となってきたことが指摘され「アジアン・セトラー・コロニアリズム」の概念が提唱された<sup>5</sup>。

先行研究では、アジア系住民がハワイで特権的な立場を獲得し、差別的な社会構造の維持を支えてきたにも拘わらず、「セトラー」としての立場に無自覚であることが指摘されてきた<sup>6</sup>。本稿では、アジア系住民のハワイにおける自然・動物との関わりに焦点を当てることで、セトラーが自らの立場を認識する際に、自然が担ってきた役割について考える。そのために本稿では、ハワイの自然と最も身近に関わってきたアジア系のハンターの動物の捉え方に着目する。

ハワイのハンターの人口は統計上では1～2%とわずかだが、実際には相当数

- 
- 3 Richard H. Grove, *Green Imperialism : Colonial Expansion, Tropical Island Edens, and the Origins of Environmentalism, 1600-1860* (Cambridge: New York: Cambridge University Press, 1995); Louis S. Warren, *The Hunter's Game: Poachers and Conservationists in Twentieth-Century America* (New Haven: Yale University Press, 1997); John F. Reiger, *American Sportsmen and the Origins of Conservation* (Corvallis: Oregon State University Press, 2000).
  - 4 Patrick Wolfe, *Settler Colonialism and the Transformation of Anthropology: The Politics and Poetics of an Ethnographic Event* (London: Cassell, 1999), 163.
  - 5 Haunani-Kay Trask, "Settlers of Color and 'Immigrant' Hegemony: 'Locals' in Hawai'i," *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000): 2.
  - 6 C. Fujikane, J. Y. Okamura, *Asian Settler Colonialism: From Local Governance to the Habits of Everyday Life in Hawai'i* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2008).

いることが筆者の現地での聞き取りから推測される<sup>7</sup>。話を聞いた地元のハンターは、統計に見られる数字は現状を反映していないと口を揃えて否定した<sup>8</sup>。しかしハンターは、組織としてまとまっておらず、発信も個人の範囲にとどまりがちなため、全体の声を得るのは困難だ。そこで筆者は2013年、2015年、2017年にそれぞれ2～3週間、主にハワイ島でインタビューと参与観察を行ない、30名以上のハンターから話を聞き、その内の3名とは日常行動を共にして、ハンティングに同行させてもらうなどした。また現地にいけない間もSNS上の発信を閲覧することでハンターの声を集めた。日常的にハンティングを行う人々には、ハワイ社会全体がそうであるようにアジア系が多く、また先住民系、白人系も含まれる。本稿は、アジア系ハンターに焦点を当てているが、筆者が話を聞いた人々は主に中国系、フィリピン系、沖縄系、日系、そしてミックスを自認する人々である。

なお本稿ではハンターに加えて、自然保護団体や州政府の職員（主に生物学の研究者）がたびたび登場する。ハンターの声を参考に、彼/彼女らについて述べることも多いこともあり、研究者はハワイに住んでいない「よそ者」であり「白人」であるという印象を与える可能性が高いが、それは必ずしも正しくないことを先に述べておきたい<sup>9</sup>。自然保護団体にも州政府にも、ハワイ系や何世代にもわたってハワイに住んできたアジア系の人々は存在する。しかしこれらの職員は、ハンターを中心とする地元住民から、本土の白人であり、「よそ者」として語られがちだ。これは、過去にはその認識が概ね正しかったこと、また論中でも扱うように、自然保護団体を「白人」と捉えることが地元の一部のハンターにとって都合が良いことなどが理由としてあげられる。

本稿では、ハンターの動物に対する考え方を理解する上で、初めにハワイに動物が渡ってきた歴史を概観する。この歴史を踏まえて、動物に対する自然保護団体とハンターの間で異なる分類や解釈について分析し、その結果動物がどのよう

7 2011年の時点の国勢調査の統計上、ハワイの総人口は、約140万人であり、州内には（16歳以上で）約23,000人のハンターがいるとされる。140万人から16歳未満の人口を差し引くと、ハワイのハンターは1～2%の計算になる。

8 インタビューでは「ハンターの4割は無許可でハンティングをする」、「昔から獲ってきた動物を獲るのになぜ許可があるのか」、「動物の管理もできない政府に、金を払いたくないから登録はしない」などの声が聞かれた。

9 ハワイにおいて白人は、たとえ何世代前からハワイで暮らしていようとも、地元住民としては認識されないことが指摘されてきた。また白人は、教育の機会や職種選択などで、優位になる傾向が強く、一般にもハワイの政財界の上層部を独占しているというイメージが強い。Keiko Ohnuma, "Local Haole: A Contradiction in Terms? The Dilemma of Being White, Born and Raised in Hawai'i," *Cultural Values* 6, no. 3 (2002): 273-85.

に扱われてきたかを整理する。後半では、主にフィールドワークで集めた声を参考に、アジア系のハンターに特徴的な動物の分類が、彼/彼女らのハワイにおける立ち位置の表現になっていることをみていく。

## I. 背景

ハワイの人と動物の関係を論じる上で、ここではまずハワイの生態系の歴史とその特徴について確認する。現在ハワイの森に生息する様々な動物は、どうやってハワイに渡り、時代ごとに人々にどのように捉えられ、扱われてきたのか。

### 1. 動物の導入とその分類

ハワイ諸島の地理的な環境は世界でも珍しいものだ。ハワイに最も近い陸地でも 3,000 キロ以上離れており、ここは長いこと外界から孤立した地域であった。そのためハンティングの対象となるような動物は、人間が持ち込むまでハワイには存在しなかった<sup>10</sup>。6世紀前後、先住民がブタなどを連れて到来し、18世紀末以降はヨーロッパ人が多種多様な動物を導入した。ヨーロッパ人が持ち込んだとされる動物は、ブタ、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマなどである。19世紀末以降のハワイには多くの労働者がアジアから渡るようになり、より広い地域から動物がハワイに持ち込まれるようになった。21世紀現在のハワイには、哺乳類では18種の野生動物が生息しており、ハワイは一年中ハンティングが楽しめる、ハンターの間で「ハンティングのパラダイス」と形容される土地である<sup>11</sup>。

同時にハワイは「絶滅危惧種のホットスポット」とも称される。ハワイは、アメリカ全土の約0.2%の面積を占めるのみでありながら、国全体の絶滅危惧種の約30%がこの土地に生息している<sup>12</sup>。隔離された特殊な環境であることに加えて、土地の開発や野生化した外来種の影響によるものとされる。欧米社会で環境問題が注目されるようになった20世紀後半以降、ハワイには生物学の研究者や保護のための活動家が多く集まった。自然保護団体がハワイの希少な動物を守るために重視してきたのは、在来種とそれを育む生態系の保護であり、それは外来種の

10 Prosper Q. Tomich, *Mammals in Hawaii* (Honolulu: Bishop Museum Press, 1986). 本文中で扱うハワイの哺乳類の基本的な情報はこの本を参考にしている。これ以外を参考にすることは注をつけている。

11 ハンターとのインタビューでもたびたびこの表現が聞かれた。George W. Cox, *Alien Species in North America and Hawaii*. (Honolulu: Island Press, 1999), 180.

12 Division of Forestry and Wildlife, *Hawaii Statewide Assessment of Forest Conditions and Resource Strategy 2010* (Honolulu: Department of Land and Natural Resources, 2013) Accessed July 5, 2019. <https://dlnr.hawaii.gov/forestry/files/2013/09/SWARS-Issue-6.pdf>.

駆除と直結してきた。

自然保護団体が用いる一般的な「在来種」「外来種」などの生物学的な分類は、自明のもののように捉えられがちだが、実際にはこれらを分ける境界線は明確ではない<sup>13</sup>。この分類は、ハワイの動物管理を理解する上で重要なので、ここでは分類それぞれの定義を解説する。なお、在来種や外来種の定義は、国、州、自治体、団体などで微妙に異なっているが、ここでは主にIUCNのものを参考としている。

「外来種 (introduced; non-native; alien species)」とは、人為によって直接的・間接的に自然分布域外に導入された種で、繁殖することに成功したものを指す<sup>14</sup>。外来種は、一般にも専門家の間でも侵略種と同義語のように使われる傾向があるが、全ての外来種が侵略種ではない。「侵略的外来種 (Alien invasive species)」は、在来の生態系に害である種と定義されている<sup>15</sup>。

「在来種 (native; indigenous species)」は、地域に自然に生じた種、人間の関与なしに特定の地域に到達した種である<sup>16</sup>。ハワイの場合で例をあげると、人が持ち込んだウシや意図せず連れてきたネズミは、船に乗って移動したことから「自力」とはみなされず外来種とされる。しかし、渡り鳥の羽に紛れてハワイに渡った昆虫は「在来種」に分類される。在来種と外来種とを分けるのは、人間の関与の有無である。ハワイのように、他の土地から隔離された環境では、動植物が「自力」で渡ってくることは困難であり、陸上哺乳類ではコウモリとアザラシのみが在来種とされる。

在来種と同義語のように使われがちな分類は、固有種である。「固有種 (endemic species)」は在来種の中の分類であり、これは地理的分布の領域が特定の範囲にとどまる種を指す<sup>17</sup>。在来種よりも固有種の方が、その地域分布の狭さゆえに絶滅の危機にさらされている場合が多いこともあって注目を集めやすい傾向がある。

これらの定義からわかるように、在来種や外来種の分類の境界線は曖昧である。人間以外の動物によって運ばれた場合は「自力」と見なされることから、定義自体が、特定の価値観に基づいて作られたものである。また人の活動が地球の地質や生態系にまで大きな影響を与えるようになったとされる人新世の時代にあつて、どこまでを「人の手を介した移動」とするかは議論が絶えない。

---

13 James Gilroy, Julian Avery, and Julie Lockwood, "Seeking International Agreement on What it Means To be 'Native,'" *Conservation Letters* 10, no.2 (2016): 238-47.

14 Alan Tye (ed.), *Guidelines for Invasive Species Planning and Management on Islands* (Cambridge, UK and Gland, Switzerland: IUCN, 2018), vii.

15 Ibid.

16 Ibid.

17 Ibid., 16.

在来種、外来種の分類は、前者の方が後者よりも「優れている」「好ましい」という前提をもって、土地に対する自らの所属を疑わない白人による優生思想のナラティブを支えるのに用いられてきたという歴史がある。自然がどのように語られてきたかを研究した S. Trudgill は、在来種と外来種の分類・概念について「人種差別」また「ファシズムに通じる」と痛烈に批判した<sup>18</sup>。ナチスは、国の「浄化」のために街路樹から外来種を取り除き、在来種を植えることにこだわったが、これは国民のアーリア化を意識したものであったと指摘される<sup>19</sup>。動植物は人間と同じように、より「優秀な種」が求められたのである<sup>20</sup>。アメリカでも、在来種・外来種といった表現が社会に広まった 20 世紀後半の時点から、動植物の分類は、特定の人々を排除するナラティブと繋がっていた。C. Elton は、生物多様性の重要性を社会に広めたことで著名な生物学者だが、彼は 1958 年に出版した *The Ecology of Invasions by Animals and Plants* (『侵略の生態学』) で、外来種の移動を人間の移動になぞらえて防ぐように警鐘を鳴らした。在来種を「純粋」で「壊れやすい存在」として表現する一方で、外来種が生態系に入ってくることは「侵略」とし、動植物の繁殖の有無は、人間同士の抗争のように伝えられ、その後の外来種に対する否定的なトーンを形成した<sup>21</sup>。在来種・外来種の分類は、生態系を守るために使われてきた一方で、特定の人々に対する排斥感情を動植物でカモフラージュしながら表現する役割を担ってきた歴史があり、排外主義を支える側面があったと言える。

## 2. 動物の排除

ハワイの自然保護団体の刊行物を見る限り「純粋な在来種」と「有害な外来種」という二項対立のナラティブは、現在ハワイで活動する生物学者の間にも受け継がれているようだ<sup>22</sup>。この傾向は、ハワイの自然保護団体の中でも代表的な存在であるザ・ネイチャー・コンサーバンシー (The Nature Conservancy、以下 TNC

---

18 Stephen Trudgill, "Psychobiogeography: Meanings of Nature and Motivations for a Democratized Conservation Ethic," *Journal of Biogeography* 28, no. 6 (2001): 680.

19 Stephen J. Gould, "An Evolutionary Perspective on Strengths, Fallacies and Confusions in the Concept of Native Plants," *Arnoldia* (Spring 1998):3.

20 Eric Katz, "The Nazi Comparison in the Debate over Restoration: Nativism and Domination," *Environmental Values* 23, no. 4 (2014): 377-98.

21 Charles Elton, *The Ecology of Invasions by Animals and Plants* (Chicago: University of Chicago Press, 1958), 51.

22 筆者が自然保護団体の関係者に直接話した際、例えば TNC に勤める先住民系の生物学者は、外来種の駆除の必要性は主張しつつも、イノブタを筆頭に多くの外来種がハワイの文化にとって重要であるなどと複雑な説明をした。しかし、団体の刊行物から、地元のハンティングの習慣を認める内容を見つけることはできなかった。

と略)の刊行物からも窺える<sup>23</sup>。TNCは、ニュースレターで保護区を「残り少ない、本来の (pristine) の自然、全てハワイの固有種で構成された森」と表現する<sup>24</sup>。例えばワイカモイ保護区は「時代錯誤な宝石」であり「1000年以上遡ったような手つかずの自然」に出合える「水晶の宮殿」の森と称えられ「神々の土地」と賛美されている。また別のパンフレットでは、イノブタを「森の回転式耕耘機」と説明し「森がなくなる原因」としている。「鼻で地面を掘り返し、地面を踏み荒らし、固有種を死に追いやる<sup>25</sup>。[...] 糞で雑草を繁殖させ、浸食した泥や糞や海外からの病原菌で水を汚染する。地上に巣を作る鳥の雛を食べ、イノブタの泥遊びは有害な外来の蚊に繁殖の場を与える」と説明が続く。写真では、イノブタの真っ黒な頭が拡大され、その中で眼光だけが浮かび上がり、恐ろしい印象が伝えられる。

刊行物では、外来種から生態系を守るためのフェンスや罠の重要性が説明され、雄大な自然の中に敷設された長いフェンスの写真と共に「この土地は有害な野生動物から自由になった」と報告される<sup>26</sup>。20世紀末の時点で、約200万エーカーの土地がなんからの形で保護の対象となっている<sup>27</sup>。これらの保護区への出入りが制限されるのは外来種だけではない。地域や形態ごとに異なる制約はあるが基本的には、研究者の例外を除いて一般の人が立ち入れない地域と、ハンター、文化的行事を行う者、ハイカーなどが入ることができる地域とに大別される<sup>28</sup>。後者の地域の場合、住民の出入りは比較的自由に行われるように思えるが、地元住民に聞くと、実際には住民は入れなくなると言う。ハンターにとっては、外来種の排除が目標とされる土地でのハンティングは成功率が低く、また時間が経つほど獲物が減るため、入る意味がなくなる。また、文化的行事を行う人の場合、自然保護団体が認めた「文化的な行事」でなければ入れないので限定的にならざるを得ない。筆者がインタビューしたハワイ系の住民は「保護区はよそ者の土地だ、白人の土地だ」と不満を述べた<sup>29</sup>。これらの背景から保護区に入るのは、研究者に加

23 The Nature Conservancy of Hawai'i, "Defending the Watershed," *The Nature Conservancy of Hawai'i*, Fall 2012.

24 Ibid.

25 Grady Timmons, "Last Stand: The Vanishing Hawai'ian Forest" (The Nature Conservancy, 2003).

26 "Hawai'i Impact Report" The Nature Conservancy, accessed May 15, 2015. <https://www.nature.org/en-us/about-us/where-we-work/united-states/hawaii/stories-in-hawaii/2015-impact-report/>.

27 Timmons, "Last Stand."

28 "Natural Area Reserves System" Department of Land and Natural Resources, accessed May 4, 2021. <https://dlnr.hawaii.gov/ecosystems/nars/>.

29 筆者のフィールドノート、Palani Smith, August 20, 2015.

えてハイカーが主である。ここに地元住民が含まれそうなものだが「研究者は本土の白人だし、ハイキングするのも観光客だ、ハイキングは白人の素敵な趣味だから」といった皮肉が聞かれた<sup>30</sup>。ハンターの間で、保護区は地元住民の土地ではないと認識されているのである。

研究者が全員「よそ者」「白人」ではないものの、自然保護の名のもとに本土や海外から来た研究者によって地元住民が追い出される傾向は先行研究でも指摘されてきた<sup>31</sup>。TNCの会報誌でも、世界中から集められた様々な専門の研究者が、ハワイの自然を守るための多様な活動を行ってきたことが報告されている<sup>32</sup>。例えばTNCは駆除のためにイスラエルの航空写真を専門とする集団の協力を得て、撮影によるハワイの森のモニタリングを実施し、最新技術のカメラを用いて外来種の監視・観察をしたり、空中からのマッピング技術で分水嶺の雑草を検知したりしている<sup>33</sup>。

保護区となった土地では、外来種また地元の住民が実質的には排除されてきた。代わりに保護区に入るようになったのは、特権的な立場を有する僅かな数の研究者であり、彼/彼女らは住民からみれば「よそ者」「白人」である。在来種・外来種といった動物の分類は、過去においてだけでなく現代のハワイにおいても、特定の人々を排除することに通じる側面があるのだ。

## II. ハンターの動物分類

ハワイで長年ハンティングをしてきた地元住民は、自然保護団体による外来種の描写に対して大きな不満を持っている。例えばTNCが「固有種を死に追いやる」と宣伝する「鼻で地面を掘り返す」というブタの行動を、ハワイの地元のハンターは全く異なる解釈で語る。

誰がハワイの土地を耕して住めるようにしたと思う？もともと火山島で人が住めるような土地じゃなかったところを、ブタたちが鼻で掘り起こし続けたから、住めるようになったんじゃないか。ハワイ社会はブタにずっと支えられてきた。外から来た人間にはそれがわからない<sup>34</sup>。

30 筆者のフィールドノート、Mike Nakamura, August 12, 2015.

31 Ashanti Shih, "The Most Perfect Natural Laboratory in the World: Making and Knowing Hawaii National Park," *History of Science* 57, no. 4 (2019): 497.

32 The Nature Conservancy of Hawai'i, "Defending the Watershed."

33 Ibid.

34 筆者のフィールドノート、Theodore Yap, August 14, 2015.

地元のハンターにとって外来種、とくにイノブタはハワイの森になくなくてはならない存在である。ここから、ハンターが駆除に反対する理由を見ていくことで、外来種がいることが自然だとハンターが捉える理由を探っていく。

### 1. 先住民系の場合

ハンターが外来種の駆除に反対する理由は様々だが、それはそれぞれの持つエスニック背景によっても特徴がある。先住民系の住民の間で反対される理由のひとつは、イノブタの問題が、彼/彼女らに対する本土からの歴史的な抑圧を想起させること、また「先住民」の「ネイティブ性」を疑うナラティブに繋がりをうからだ。筆者が行ったインタビューで、先住民系のアイデンティティが強いミックス系のパラニ・スミスの声を参考にする。インタビューした当時、彼はハワイでハンティングやフィッシングの権利のために活動してきた団体、ハンターズ・アンド・フィッシャーメンズ・アソシエーションの代表だった。

自然保護団体は「これは希少な生態系だから守るべきだ」と言って、全ての土地をフェンスで囲み、動物を撃ち殺していく。[...] 動物を酷い方法で殺して、フェンスを作って僕たちを土地に入れなくしてきた。そのせいでハワイの動物はどんどん減っている。イノブタはネイティブじゃないから、ハワイの自然環境にとっては不自然だと科学者は言う。だけど先住ハワイ人が連れてきた動物がどうしてネイティブじゃないんだ。おかしいだろ<sup>35</sup>。

イノブタは自然保護団体にとっての駆除の対象であると同時に、先住民の間で受け止めが複雑な種だ。パラニの発言のように、ネイティブ（先住民）の持ち込んだ動物なのだから、ネイティブ（在来種）であるとする人々もいる。また現代のハワイの森に見られるイノブタが、ネイティブが持ち込んだ種と他の地域から持ち込まれた種との交配が進んで生まれたイノブタであることを認識した上で、在来種である、もしくは外来種であると考える人もいる。しかしいずれにせよ「ネイティブ」であるハワイ先住民が持ち込んだ動物の子孫を「外来種」「害獣」と呼ぶことに対して否定的な先住民は多い。

自然保護団体は、現在のハワイの森に生きるイノブタは、先住民が連れてきた種と19世紀以降に持ち込まれた種との混血であることを強調し、先住民の伝統

---

35 筆者のフィールドノート、Palani Smith, August 20, 2015.

にとっての現代のイノブタの重要性を否定してきた<sup>36</sup>。これに対してパラニは次のように述べた。

「ポリネシアのイノブタの血が何パーセントしか入っていないから、今のイノブタは先住民の連れてきた種ではない」というのは、いかにも白人らしい言い訳だ。これと同じことは先住民に対しても行われてきた。[...]本土だと、血の割合を書かれるのは先住民と犬と馬くらいだと言うけれど、ハワイの場合は先住民とイノブタだ<sup>37</sup>。

この発言は、本土を含めたアメリカ先住民の間で大きな問題となってきた、血統による先住民の証明に関する言及である。先住民であるか否かが、セトラーの決めた「血の割合」で決められてきた歴史があり、パラニはこれと同じことをイノブタの分類に見ている。「先住民」と認められないことは、様々な権利や補償を得られないことと同意である。例えばハワイの場合、1920年に制定された Hawaiian Homes Commission Act によって、先住民専用の居住区への入居資格として、ハワイ人の血を50%以上引いていると証明しなければならないことが定められている。血の割合の概念がハワイの伝統的な親族の概念と相容れないことなどがあり、たとえ先住民の間でハワイアンであることが自明でも、書類上先住民と認められない人は多く存在する。人種問題を扱う研究者は、血の割合を問うことを先住民に対して今も続く植民地主義に基づく暴力であると指摘してきた<sup>38</sup>。つまり、先住民系のハンターにとっては、先住民が「先住民であるか否か」を判断する機会をセトラーに奪われてきたのと同様に、イノブタの文化的重要性もセトラーによって否定されてきたものと映るのだ。

さらに、先住ハワイ人が連れてきた動物が「ネイティブ」つまりハワイの在来種でないのならば、先住ハワイ人の「ネイティブ性」の否定にも繋がらうという問題がある。先住民系のハンターにとって、駆除の前提となる外来種・在来種といった分類は、先住民の伝統的な自然観を無視した西洋的な思考の押し付けである。そのため先住民系のアイデンティティを持つハンターにとって、自然保護団体がイノブタを外来種と呼ぶことは、ハワイで今も続く先住民に対する植民地

36 TNCなどの自然保護団体がイノブタを外来種であるという説明をする際、次の資料が根拠としてあがる。K. Maly, B. K. Pang, and C. P. M. Burrows, "Pigs in Hawaii, from Traditional to Modern" (unpublished manuscript, 2013).

37 筆者によるインタビュー、Palani Smith, August 20, 2015.

38 Kehaulani J. Kauanui, *Hawaiian Blood Colonialism and the Politics of Sovereignty and Indigeneity* (Durham: Duke University Press, 2008), 3.

主義に基づく抑圧と捉えられるのだ。

## 2. 移民の子孫の場合

先住民系のハンターと同じく、外来種の排除に不満を抱くのは、同じく地元でハンティングをしてきたアジア系住民である。動物を「外来種」と呼ぶことは、アジア系住民にとっても不都合なことだ。そもそも「外から来た」ことを排除する根拠とする主張が、ハワイに比較的歴史上最近移住してきたことが明確なアジア系移民の子孫にとって、居心地の悪い語りであることは想像に難くない。アジア系住民にとっては、イノブタを筆頭とする地元の野生動物のほぼ全ては、祖先がハワイに到達した時点ですでに森に存在していた動物であり、生息していることが「自然」な動物である。「外来種」よりも後から来た集団であるアジア系にとって、野生動物を「外来種」と呼ぶことは、自分達が「外から来た」ことを強調することに近く、自らのハワイへの所属の意識に揺さぶりがかかる。

外来種の駆除は、本土の白人を社会の中心とした差別的な価値観を象徴するものとして捉えられる傾向があるが、逆にハンターの求める外来種の保全は、動物にせよ人間にせよ、異なるものを受け入れてきたことの象徴だ。例えばハワイでの地元のハンティングが始まった歴史についてインタビューしていた際に、先住民系のハンターは次のように語った。

ハワイアンは移民がハワイにやってくるずっと以前から森で野生動物を獲っていた。[...] ハワイアンは人種で分けて考えない。お腹が減って困っている人がいたら、食べ物を分け与える。食べ物を得る方法も教える。[白人]なら獲る方法を教える代わりに金を払えと言う。これは私の肉だ、と言う。肉をとったら訴える、と言う。(笑) ハワイアンは違う。誰だって食べなきゃいけない。[...] 独り占めをしようなんて発想はない<sup>39</sup>。

地域の動物のハンティングの歴史は、先住民の寛容さを示すものとして語られる傾向が強い。またハンティングは、異なるエスニック背景を持った人々を繋げてきたという文脈でも語られる。オアフ島出身の1947年生まれの中国系のノーラン・カムによれば、人々が仲間になるきっかけは、プランテーションの地理的環境と、エスニック集団の違いを超えたハンティングへの共通した情熱があった。プランテーションでは分割統治が行われており、基本的には同じエスニック集団

---

39 筆者のフィールドノート、Keven Haake, August 8, 2015.

ごとに居住地区が決められていたが、それぞれの地区は隣接していた<sup>40</sup>。そのため、エスニック集団の垣根を超えて、誰がいつハンティングに行くかは知れ渡りやすい環境だった。また、ハンティングをするには、車で山奥に移動することが必要であり、そのためには異なるエスニック集団に属する人同士が互いに頼らなければならないこともあった。カムは次のように話した。

私は純粋な中国系ってことになっているけど、たぶん違う。中国人に見えないから。でも、当時は異なるエスニック集団間に生まれた子どもは大問題でタブーだった。だから私の家族は、私を中国人だって言っていた。でも、小さい頃は見た目が違うから子どもたちにいじめられた。どのグループにも仲間に入れてもらえなかった。[...] でも、10代になって、私はハンティングがしたかった。そうするとトラックを持っている人の所に行くしか方法がなかった。トラックに皆集まった。[...] ハンティングをするという目的があるから、どこ出身とか、いじめられるとか、どうでも良くなっている。トラックを持っているのが日本人なら日本人のトラックに乗せてもらわなきゃならない。[...] ハンティングに行く時は朝が早い。イヌもトラックに乗せるから騒がしくて、近所の人は皆、誰がいつハンティングに行くか知っている。ハンティングに関心があれば、トラックの持ち主に「一緒に行って良いか」と聞く。その時は、どこの出身だから連れて行かないなんてケチなことは言われない。一緒にハンティングに行っているうちに仲間になる<sup>41</sup>。

このように、インタビューでは当時のハワイにおける移動手段の制限や人々の住居環境の事情が背景となって、様々なエスニック集団がハンティングという共通目的のために行動を共にしたと語られた。ハワイ系にとってもアジア系にとっても、ハンティングとその獲物である野生動物は、彼/彼女らのハワイにおけるアイデンティティの形成を支えるものである。また異なるエスニック集団が、寛容さを持ってハワイで共に生きてきたという物語を支えるものでもあるのだ。

### 3. 独自の分類

ここまでのことから明らかなように、多くの地元のハンターは外来種を含む動物を地元の恵みとして捉えており、駆除には反対である。在来種・外来種という

---

40 Gary Y. Okihiro, *Cane Fires: The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865-1945* (Philadelphia: Temple University Press, 1992), 31.

41 筆者のフィールドノート、Nolan Kam, August 25, 2017.

区分自体が、本土の思想であり、科学的な区分ではないという批判もハンターの間で度々聞かれた。日系人やミックスのハンティング仲間の中で、次のような会話が合った。

だいたい1980年代より前の在来種の定義は「白人以前(Pre-white man)」だった。だからポリネシアンは先住民だし、ポリネシアのイノブタはハワイの在来種だった。ところがある時、野生のイノブタが「在来種」だと、駆除の対象にできないことに自然保護団体やアメリカ合衆国魚類野生生物局(U.S. Fish and Wildlife Service、USFWS)は気がついた。そこでUSFWSは「在来種」の定義を「人間以前(pre-human)」に変えて、野生のイノブタを駆除の対象にした<sup>42</sup>。

この発言者は、在来種の定義は連邦政府によって意図的に変えられたと主張した。その場にいた友人らは、何度も頷き「その通りだ」と口々に賛同した。しかしハワイの在来種を決めるのは州政府であり、在来種が「人間によって持ち込まれていない、ハワイの海と陸に人間の助けなしで生息するようになった動植物」と定義されて以降、この定義に大きな変更が加えられたという事実は確認できなかった<sup>43</sup>。また過去に州政府が出した公式な文章にも「在来種」の定義が「白人以前」とか「1778年以前」と記載されていたことを示す資料はない。つまり彼らの「在来種の定義を連邦政府が意図的に変えた」という指摘は、少なくとも書類上では間違っていると言えるだろう。しかし「在来種の定義を本土の人間が意図的に変えた」という話題は、ハンターの間では繰り返し語られてきた。繰り返し語られるなかで、彼らの間では「地元住民のみが知る真実」として浸透している。

こうした意識から、地元のハンターの間では自然に対する独自の常識が形成されてきた。同じ動物に対して、自然保護団体やマスメディアとは異なる名称を使う。自然保護団体がイノブタのようなハワイの野生動物に使う表現は「外来種」や「侵略種」が主であり、ハワイの主要メディアも同様の表現を使用する。対して地元のハンターは、イノブタのことを外来種とは呼ばない。代わりに、単純に「動物」もしくは「ハンティングのための獲物」「地元の動物、ローカルの種(local animals)」と呼ぶのである。

地元のハンターが外来種という分類を否定し「動物」「ローカルの種」と呼ぶ理由の背景には、特定の動物を「外来種」と呼ぶことが排他的な思想に繋がって

42 筆者のフィールドノート、Mike Nakamura, August 12, 2015.

43 Wildlife and Plants Conservation. Act 65, 1975. S.B. 1665. Session Laws of Hawaii.

いるという意識が人々の間にあるためだ。動物を「外来種」とすることは、血の割合やハワイに渡ってきた年代などといった数字によって人を分ける本土の一方的な線引きを支持することと同意である。ハンターにとって、外来種を「ローカルの種」と呼ぶことは、本土とは違うハワイ独自の価値観の表現なのではないか。

### Ⅲ. 「ローカルの種」の意味

しかし、地元のハンターも一枚岩ではない。動物を「ローカルの種」とすることは、地元のハンターの一部にとって都合が良く、また他の一部にとっては都合の悪い意味合いがある。在来種・外来種といった動物の分類に、本土の人種に対する意識が見え隠れするように、ハワイのアジア系住民もまた、地元独自の動物の分類を自らの主張に利用してきた。

#### 1. 在来種と同じ外来種、先住民と同じアジア系住民

ここからアジア系住民が、ハワイの外来種を「ローカルの種」「動物」と呼ぶこと背景にあるものについて考えていく。まず、ハワイにおいて「local」という表現は、ただ「地元の」という意味以上のニュアンスを含んでいる。本来は、文字通り「地元の」としての意味で、白人入植者との比較で先住民を指す言葉だったが、急速な西洋化に伴い徐々に伝統的な暮らしを保つ地方で生活する先住民を指すニュアンスを含むようになった<sup>44</sup>。20世紀前半には、白人入植者に差別されてきた先住民や非白人の労働者をまとめた言葉として local という言葉が使われるようになった<sup>45</sup>。しかし20世紀末に local という言葉は、セトラーと先住民の相違を抹消するような表現であると批判された<sup>46</sup>。ハンターの間では、ただ「地元の動物」という意味で使用される表現だが、local という言葉は、アジア系住民のハワイへの帰属の正当化のメッセージを内包しているのだ。

人々の「動物」という言葉の使い方からも、アジア系の所属に関するメッセージを読み取ることができる。2012年のハワイ島で行われたハワイ郡議会で聞かれた、動物に関する語りを事例として取りあげたい。同議会には、自然保護団体によるイノブタやヤギなどの大規模駆除の中止を求める多くの地元のハンターが参加していた。次の人物も、ハンターであると名乗ってから、駆除をやめるよう

44 Davianna McGregor, *Na Kua'aina: Living Hawaiian Culture* (Honolulu: University of Hawai'i Press, 2007).

45 John P. Rosa, "Local Story: The Massie Case Narrative and the Cultural Production of Local Identity in Hawai'i," *Amerasia Journal* 26, no. 2 (2000), 100.

46 Trask, "Settlers of Color," 2.

にと次のように訴えた。

〔環境問題について〕あれは動物のせいだ、これも動物のせいだといった批判をよく耳にする。だけど [...] 動物を責めることはできない。[...] 外来種、侵略種と言う言葉を、私たちはなくさなければならない。[...] 動物は、ここの人々に、文化に、我々と同じように繋がっているのだから<sup>47</sup>。

この発言者は、外来種・侵略種もハワイの自然の一部だと主張し「外来種・侵略種」という括りを否定している。また発言者は「動物はハワイの土地や文化に住民と同じように繋がっている」としている。侵略種から「侵略する」もしくは外来種から「外から来た」という要素を取りのぞき、単に「動物」と呼ぶべきという主張と、動物を人に喩えることを重ねると、それは移民から「移って来た」という要素を取り除き、ただ「住民」と捉えるべきという主張である。

このように、土地との関係において「先住民と変わらない一集団」という自己認識を持つアジア系のハンターは、ハワイを代表して自然のあるべき姿を語る。ここでは、ハワイの野生動物やハンティングの文化を守るために活発に活動してきた地元のハンターである沖縄系のブライアの言動を取り上げる。ブライアは、ハンターの間で「地元の期待の星」と呼ばれる、ハワイ郡の公聴会などでもハンティングの存続の必要性を積極的に訴えてきたハンターの一人である。彼は筆者とのインタビューでハンティングのための活動を始めたきっかけは、彼が本土の大学を卒業し、ハワイに帰ってきた時の衝撃だったと言った。

マウナケアはいつまでも変わらないと思い込んでいた。ところが本土から帰ってきたら、巨大なフェンスが建っていて、多くの動物が駆除されていた。[...] 最近は、外から来た人たち (outsiders) がハワイの文化や政治を変えつつある。[...] 地元住民は、外の人たちのように主張しないし、発信しないから文化をなくしつつある。僕はこれを目の当たりにして、なにか行動を起こさないと、ハワイはもう僕が故郷 (home) と呼べる場所ではなくなってしまうと思った<sup>48</sup>。

---

47 Big Island Video News, "Hunting bills go before Hawaii County Council," June 6, 2012. Accessed July 21, 2018. <https://www.youtube.com/watch?v=a4007Mv88Uc&list=PL8FBA278258A6DFD7&index=2>.

48 筆者のフィールドノート、Brian Yamashiro, August 15, 2015.

ブライアンが語るマウナケアの土地は先住民の聖地とされる山であり、先住民から見れば、ブライアン自身も「ハワイの外から来た人たち」の子孫である。また「外から来た人たち」がハワイの文化や政治を変えてきたのは「最近」ではなく1世紀以上継続してきたことで、彼のハンティング自体がマウナケアにおける変化の一部だ。しかし彼は、自分がハワイを変えてきた「外」からの移民の子孫であることには触れず、ハワイを「故郷」と呼び、フェンスを敷設した政府の自然保護団体の研究者のみを「ハワイの外から来た人たち」であるとして語る<sup>49</sup>。

ブライアンは「ハワイの外から来た人々」に対抗すべく、大学卒業後、地元のハンターの声を積極的に発信してきた。SNSを通じて、ハワイの動物のハンティング情報を掲載したり、ハンティングを守るための署名活動の紹介をしたり、時には彼自身のハンティングへの心情を書き綴った投稿を載せたりすることもあつた。次の文章は、ブライアンが自分の子どもの頃からのハンティング経験を振り返りつつ、自然保護団体や政府を批判した投稿である。

過去の記憶を振り返ると、父親と彼の12歳の息子が火山岩の上を歩いているのが見えてくる。息子は始めて自分の弓矢で獲った獲物を担いでいる。一度は不可能だと思っていたことが〔…〕やっとな達成できた。その日〔…〕生命の始まりと終わりを見る感覚とその意味を学んだ。〔TNC〕には一生涯理解できないだろう。在来種、外来種、害獣、生物の多様性、分水嶺、絶滅危惧種、潜在的脅威とかの問題じゃない。科学が全てじゃない。…学術書を読んでも得ることのできない絆。〔…〕これはリクリエーションとかそういう簡単なものじゃない。生き方そのものだ。〔…〕生活の一部だ。教えたり、読ませて理解させたりできない純粹 (pure) なものだ<sup>50</sup>。

投稿の中で、ブライアンは自分の子供時代からのハンティングの経験を、本来のあるべきハワイの生き方のように語っている。彼の文章は、本土の白人が自らのセトラー性を消す際に使用してきたと指摘されるナラティブに酷似する部分が多い。アメリカにおけるハンティングの歴史を研究したD. Hermanは、開拓期

---

49 マウナケアなどの山は、ハワイの自然の変化にアジア系住民が関与してきたことを象徴している。ハワイには世界の科学者から天体の観測に理想的とされる地域があり、これらは先住民に神聖視されてきた土地でもある。マウナケアもその土地のひとつであり、先住民の反対を押し切って天文台、望遠鏡が建設されてきた歴史がある。2010年代に建設が計画された30メートル望遠鏡を巡っては、先住民が反対し、アジア系は支持する傾向が強い。2010年代に反対を押し切って建設されたダニエル・K・イノウエ太陽望遠鏡は、その名称からもアジア系がハワイの自然を変えてきたことを象徴する。イノウエは日系人として始めて連邦上院議員となった人物である。

50 Brian Yamashiro. 2015. "Memories," Facebook April 20, 2015.

の白人がハンティングを根拠に自らをアメリカの先住民として描いてきたと指摘した。Herman曰く、森で生活し地域の自然を熟知する白人のハンターは自らを、先住民から土地を奪ったセトラコーロニアではなく、土地を受け継いだ「アメリカのネイティブ」と捉える物語を語ることで、自身のセトラコーロニア性を消してきた<sup>51</sup>。これと同様にブライアンも、ハンティングをしてきたことを根拠にハワイの土地との「絆」を自明とし、自らのセトラコーロニア性を覆い隠す。

さらにブライアンの記述には、アジア系の、つまり非白人系セトラコーロニア独特の特徴も垣間見える。先ほどの投稿は次のように続く。

居場所を得る感覚、文化を持つ感覚を得るのに、ハンティングほど拠り所となるものはない。〔ハワイには〕この感覚を知っている人が僕以外にも沢山いる。だけど僕たちは消されようとしている。こんなに美しい場所にながら、僕のように悲しい気持ちになる人が増えないことを願っている。でもこの悲しみはこれからも続くだろう。もう科学の問題じゃない。僕は自分と違うものは全て排除する人々を知っている。僕たちが僕たちであり続けることを諦めないことを願う<sup>52</sup>。

これは自然保護団体や州政府への批判を綴ったものである。ここでブライアンは、自らを排除される存在として表現しており、それはまるで本土の白人に排除されてきた先住民のようだ。ブライアンはハンティングを通じて、土地の自然を熟知している「ネイティブ」というだけでなく、白人に排除されてきた「ネイティブ」としてのイメージを表現している。アジア系住民は、ハワイの自然との繋がりにおいてのみならず、白人との関係性から二重にハワイの先住民になりかわった自画像を描くことができるのである。

## 2. 消される在来種、消される先住民

ハワイのハンターらの呼び方に倣って、外来種を単に「動物」とする場合、その「動物」という言葉には在来種も含まれる。これを人に置き換えれば、記述したように移民の子孫がただの「住民」になるだけでなく、先住民もただの「住民」として括られることになる。これは、先住民をアジア系住民と同じ、ハワイのマイノリティに変換することに等しいだろう。ハンターによる「動物（外来種）」

51 Daniel J. Herman, *Hunting and the American Imagination* (Washington; London: Smithsonian Institution Press, 2001), 121.

52 Yamashiro, "Memories."

はハワイの土地や文化に住民と同じように繋がっている」という発言を思い出してほしい。これは、外来種も在来種と同じようにハワイの自然の一部であるとする主張だが、逆に考えれば、在来種だからと言って、ハワイの自然と特別な関係性があるとは限らないという主張にもなり得る。

アジア系のハンターの多くが、外来種だけでなくハワイの在来種・固有種を大切に思っていることは疑いようがない。筆者がハンターの自宅を訪れた際、固有種の鳥や植物の絵や写真が飾られていることは多く、それに言及すると、彼/彼女らはその動物の美しさや特徴を誇らしげに語ってくれた。しかし同時に、アジア系のハンターは、固有種を「遠い存在」であるかのように語る側面もある。これはハンターによる動物の呼び方の言い換えからわかることだ。例えばハンターが頻繁に「環境保護団体の鳥」と呼ぶのは、自然保護団体が保護を進めてきたハワイの固有種のバリラである。ハワイの固有種であるカタツムリのことを「政府の大事なカタツムリ」と揶揄することが珍しくない。保護区として新たなフェンスが敷かれることになったことを知った際、あるハンターは「またフェンス敷設のプロジェクトでハンティングの土地が奪われた。あの人たちの動物を守るためにフェンスで囲った土地は、もう充分すぎるほどあるのに。〔自然保護団体〕は満足というものを知らない」と発言した<sup>53</sup>。この発言者が「あの人たちの動物」としたのは、ハワイの固有種だった。これらの言葉の選択からわかるように、ハンターの間で在来種・固有種は、自然保護団体や政府の所有物のように語られ、外来種と比べて縁遠い存在だ。

固有種が、アジア系のハンターから「自然保護団体の所有物」と捉えられていることは、地元の動物が住民に喩えられてきたことを踏まえれば、間接的に現代ハワイにおける先住民の居場所の否定にも繋がるのではないか。実際、アジア系のハンターの間で、地元の自然やコミュニティとの関係において先住民のハンティングが批判的に語られることはしばしばある。この背景には、先住民が移民の子孫にはない特別な権利を有していることがある。ハンティングは危険を伴う活動であるため、過去にはハンターが禁止された場所で獲ることや、誤って獲物以外を撃ってしまうなどの事件から裁判が度々起こってきた。事件を起こしたのが、先住民系のハンターであった場合、許可のない私有地でのハンティングであっても権利のために無罪となる事例もあり、土地所有者やハンターの間では注目さ

---

53 こうした言い換えの表現はフィールドワークでたびたび聞かれたし、新聞などでもハンターの声として目にするのは珍しくない。Jason Armstrong, "Hunters Protest Restrictions," *Hawaii Tribune Herald*, January 24, 2012, 6.

れてきた<sup>54</sup>。そのため、先住民のハンティングは、地域住民の間でハンター全体への警戒を高める要因として認識される側面がある。こうしたことからアジア系のハンターは、伝統的な先住民の文化への親しみを語る一方で、現代における先住民特有のハンティングの権利に関しては否定的になりがちだ。

アジア系ハンターの心理を表す事例として、中国系のハンターのアルヴィン・チャンの発言をここでは取り上げたい。アルヴィン曰く、彼はハンティングの一環として、平均して常に6個は罠を設置して動物を獲っている。設置場所は知り合いの敷地だったり、「昔から動物を獲ってきたみんなの土地」と呼ばれる場所だったりする。子供の頃から学校の帰り道に、罠に動物がかかっているか確認しに行くのが彼の日課だった。彼はそれを「僕のクレアナだ」とハワイ語を使って表現した。「クレアナ」の意味を聞くと、彼は「土地に対する責任とか、地元の動物や人を守ることだ」と説明した<sup>55</sup>。設置している罠に動物がかかっていたら、獲物の苦しみで最小限で済むようその場で止めを刺す。自ら、もしくは彼の家族が、獲物を捌いた後には、その肉を近所の人と分けたり、ホームレスのシェルターに持って行くなどしたりして、必要な人に届ける。動物は、花や果実などを植えた土地を荒らすし、遭遇したら危険でもあるため、アルヴィンの行為は、近所住民から感謝されてきた。彼にとってハンティングは、趣味、習慣であると同時に、地域の人と動物の共存を助けるものであり、地元コミュニティへの貢献である。

いつ動物が罠にかかっていたとしても、すぐ仕留められるように、僕のトラックには必ず槍が入れている。もちろん僕はこれを一定の許可された地域のみで使う。[...] でもハワイアンは違う。ハワイアンは権利があるからどこでも動物を殺せると思っている。[...] そうした考え方のせいで、ハワイのハンターや地域の人たちがどれだけ迷惑してきたことか。[...] 高校時代、ハワイアンの生徒が起こした事件が学校の新聞に載ったことがある。イノブタと見誤って、私有地にいたウマを殺してしまったバカがいたという記事だった。しかも殺しておいてイノブタじゃないとわかって逃げた。知識も責任感もないんだ。[...] ウマをイノブタと間違えるなんて呆れるしかない。[...] 普段からハンティングをしていない証拠だ。[...] そのウマがいた私有地の所有者は、それまで比較的ハンターに寛容な人だった。僕たちもよくそこではハンティングしてきた。だけどその事件があった以降は厳しくなった。

54 先住民がハンティングの権利を認められた事例として、ゲイ・アンド・ロビンソンの私有地でイノブタを獲ったことが発端となった2015年の裁判があげられる。

55 Kuleana は、ハワイ語で「義務」や「関係性」に近い意味とされる。ハワイ社会で非先住民の間でもよく知られたハワイ語だが、一般的には先住民系の人を使う言葉という印象である。

〔…〕 ただでさえ本土から引っ越してきた住民が増えていて、本土の人たちはハンターを自分達の敷地に入れたがらないから、僕たちがハンティングできる土地は減っている。〔…〕 昔は地元のルール (honor system) があって「この土地で獲っていいですか」って聞く文化がハワイにはあった。日本人や中国人の文化だ。〔…〕 それなのに、一部の人たちのせいでハンティングの印象が〔…〕 悪くなる。大半のハンターは規則にしたがってハンティングをしているのに、僕たちは先住民の権利を掲げる人たちのとぼっちりを受けているんだ<sup>56</sup>。

アルヴィンは先住民系のハンティング仲間も多くいて、先住民のハンティングそのものを否定するわけではない。しかし、先住民のハンティングの権利を主張する人々は「迷惑な住民」として捉えている。それに対して、ハワイにおけるハンティングの良識は、アジア系の礼儀を重んじる文化によって成り立ってきたと語られる。そして、本土から移ってきたばかりの移住者や「(ハワイの自然や動物への) 知識も責任感もない」先住民との対比で、アジア系のハンターである自らを、ハワイ本来の自然や暮らしを守る存在である「クレアナ」を果たす存在として語る。ハンティングを行ってきた経験が、彼に、先住民と同等にもしくはハンティングをしない先住民よりも、ハワイの土地に根付いているという自負を与えてきた。

アジア系のハンターは、先住民と共にハンティングをしてきたことを地元の歴史の一部として誇らしく語るが、先住民だけに特別なハンティングの権利があることには否定的であり、ハワイ系を、アジア系と同じ、地域住民の集団のひとつとして捉えようとする。逆にアジア系は、ハンティングが根拠となって、ハワイの土地との強い繋がりがある存在として語られる。これは言葉を変えれば、先住民を消して、先住民を排除した土地に対する自らの所属を主張する行為であり、アジア系・セトラ系・コロニアリズムを体現するものである。

## おわりに

在来種・外来種と言った分類は明確な境界線を引くことができないものだが、自然保護団体は、ハワイの固有種の保護のため、外来種の駆除を進めてきた。自然保護団体はハワイの多くの土地を保護区にし、外来種を排除することに成功してきた。しかし先住民にとって、一部の外来種は先祖が連れてきた動物であり、

---

56 筆者のフィールドノート、Alvin Chan, August 20, 2017.

伝統的に重要な動物だ。アジア系住民にとっても、外来種とされる動物の多くは祖先がハワイに到達した時点ですでにハワイに存在した動物で、生活の糧となってきた森の恵みである。住民の間で、先住民とアジア系のハンターは共に動物を獲る過程で仲間になったという物語が形成されており、動物とそのハンティングはハワイの寛容さ、人々の共存の精神の象徴として語られてきた。そのため、地元のハンターにとって外来種を守ることは、自然科学では一般的な研究者の引いた在来種と外来種という動物の境界線を否定し、地元の歴史観、また生活の感覚に沿う自然観を優先することだ。外来種をハワイの自然の一部と主張することは、自然保護言説の押し付けへの抵抗であり、コロニアリズムに対する批判を意味すると言えよう。

しかし自然保護団体による外来種の駆除が、特定の自然観、基準の押し付けであるように、アジア系住民もまた、動物の分類を通じて自らの基準をハワイに広めようとしている。ハンターは、在来種も外来種も、ただの「動物」もしくは「ローカルの種」と呼ぶ。外来種を「動物」もしくは「ローカルの種」と捉えることは、アジア系住民を先住民と同じであるとするナラティブに通じる。また先住民をアジア系と同じハワイの一マイノリティと捉え、むしろ地元でのハンティングに精通したアジア系の方が、ハンティングをしない先住民よりも、ハワイの土地との絆が深いのだという意識にも繋がっている。これは先住民を不可視化する行為とも取れるだろう。アジア系のハンターは、生物学的な動物の境界線を消すことを通じて、ハワイに対するコロニアリズムに抵抗してきたことが考えられる。しかしその一方で、アジア系のハンターは、在来種と外来種の境界線を否定することで、アジアン・セトラー・コロニアリズムを推し進めてきた側面もある。地元でのハンティングは、アジア系住民にとって、自らのセトラー性を覆い隠し、ハワイの土地との繋がりを意識させる行為なのである。

*ABSTRACT*

## Asian Settler Colonialism and Wildlife of Hawai'i: The Categorization of Alien Animals as “Local Species” among Hunters

Eri Kato

Hawai'i is a settler society where the Native population continues to struggle with U.S. colonialism. At the end of the 20th century, Asian residents were criticized for their claim to a “local” identity as it masks their contribution to the creation of the colonial system in Hawai'i. Since then, scholars have re-examined the history of Asians using the Asian Settler Colonialism theory. In previous studies, attention has been given to Asians who moved into positions of power at the center of areas like government, the judicial system and industry. This paper explores the practice of Asian Settler Colonialism involving Asian residents who are not necessarily considered to be at the center of politics or business. Instead, it focuses on the people at the center of some of the smaller communities in more rural parts of Hawai'i. Specifically, I focus on Asians who identify as local hunters. The aim is to understand how Asian settlers construct their own narrative in relation to nature to claim their place in Hawai'i.

First, this paper reviews the controversy between hunters and conservationists over the management of wildlife. Among these two groups, there is disagreement over which animals “originate in” Hawai'i. Considered one of earth's biodiversity hotspots, Hawai'i is struggling with non-native species who are rapidly threatening the survival of native species. This has led many scientists from the mainland U.S. to Hawai'i, and they have been influential in environmental management. For them, game species should be eradicated as they represent invasive species. However, hunters object to the notion of eradicating certain wildlife. For Native Hawaiians, their ancestors arrived with some of these animals, and to categorize the creatures as “alien” contradicts the cultural understanding the Native Hawaiians have of themselves. For Asians, the animals were there before they reached Hawai'i.

Considering the animals as “alien” that came before Asians would emphasize their own foreignness. Moreover, the people I spoke to who come from generations of hunters see animals as a blessing from the land. Therefore, eradicating the animals is seen, among hunters, as a new form of U.S. colonialism. To Asian hunters, protecting local animals means protecting the culture together with Native Hawaiians. As a result, local hunters object to the categorization of “native” and “alien” species and refer to each hunted species as “local animals.”

While hunters’ objection to calling something “alien” symbolizes the fight against U.S. colonialism, calling non-native species “local animals” normalizes a narrative that denies the distinct status of the Native population. The term “local” is used to equate Natives to other immigrants which led to an erasing of indigenous rights. Therefore, while Asians reject the scientific categorization of animals as a way to fight U.S. colonialism, they also use it to hide their settler status in Hawai‘i. Through examining Asian local hunters’ view on nature, this paper aims to map out how Asians locals use their own categorization of animals to claim their place in Hawai‘i.

